

2021年7月18日～7月24日 各家庭でのディポーション用テキスト

■逸脱についての訓練 (3/4)

そのあとのことは、よく知られている。敵はダニエルの様子をうかがい、ダニエルは獅子の穴に投げ入れられた。そして神は、このしもべの行動をよしとされたしるしに、御手を差し伸ばされた。私たちの直面する危険は、ダニエルのときほど恐ろしいものではないかもしれない。その救出方法も、ダニエルの場合ほど劇的ではないかもしれない。しかし、それにもかかわらず、外部の危険により、また私たち自身の内なる危険により、私たちは、任務から横道にそれる可能性に直面している。神と人とに対する責任を忠実に果たし、「主は私の助け手です。私は恐れません。人間が、私に対して何ができましよう」と言うことのできる人は幸いである（ヘブル 13:6）。どのような危険があろうと、果たすべき任務を果たしうるような訓練を積むことこそ、たいせつなことである。

与えられた任務のうちの不必要な細部を強調しすぎて、任務からそれる場合もある。これに関連してラザロ、マリヤ、マルタの家での主の美しい物語が思い起こされる（ルカ 10:38-42）。主は彼らの家で、どんなに歓迎をお受けになったことであろう。そのときのマリヤについて、「主の足もとにすわって、みことばに聞き入っていた」と記されている。マリヤはなすべきことを手早くなし終えて、主のみことばに聞き入る時をつくることができたのかもしれない。しかしマルタはあまりにも多忙であった。そしてついに、主に対して不平のことばを漏らさずにはいられないと感じた。「主よ。妹が私だけにおもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのでしょうか。私の手伝いをするように、妹におっしゃってください。」

熱心な忠実な働き人であるなら、このときのマルタの立場がよくわかるであろ

う。マルタには、助力を期待する権利があった。この家に、比類もない「お客さま」がおいでになったのではなかったか。そのお客さまは、最上のもてなしをお受けになるべきではなかったか。

このときの主のお答えは、私たちに大いなる光を与えるものである、「マルタ、マルタ。あなたは、いろいろなことを心配して、気を使っています。しかし、どうしても必要なことはわかずかです。いや、一つだけです」(41、42 節)。主がここで言うとおとされたことを深く識別しようとして、多くの努力がなされてきたが、これまでに私の目に留まったものは、すべての的をはずれている。主は女の人の心をよく知っておられたし、マルタがこのお客さまのために最上のもてなしをしようとしていたこともご存知であった。しかしながら主は、ごちそうの量が少なくてもよいからもっと交わりを持ち、皿の数を減らしてもよいから永遠のことについて語り合い、もっと質素でもよいからもっと主に耳を傾けてほしい、と思われたのである。「どうしても必要なことは……一つだけです。」何か簡単に調理できるもの、いわゆる一汁一菜でよいのだ。そうすれば、靈的な事柄、「取り上げてはいけない良いほう」(42 節)について語り

合う時間も体力も残るだろう。私たちは物事の細部—それは興味あることであり、必要なことでもあるが—によって、義務や喜びから逸脱させられる。木々に目を奪われて森全体を見ることができず、食事の用意にやきもきして来客と交わりを持つことを忘れ、給仕に気を取られて客の話に耳を傾けることができず、寄り道が多すぎて目的地に着かず、あまりにマルタのようであるためにマリヤのようになることができない。確かに私たちには多くのことができるが、「良いほう」を失ってしまう。

【V・レイモンド・エドマン 人生の訓練 第二十七章「逸脱についての訓練」より】

※この本は図書に置かれています。さらに読みたい方はどうぞご利用下さい。